研究ノート

日本語ノ形容詞の位置づけと特性について

A Study of the Characteristics of No-adjectives in Japanese

中村　その子 *
Sonoko NAKAMURA

キーワード：形容詞、ノ形容詞、第三形容詞
Keywords：adjective, noun, part of speech

1. はじめに

日本語の形容詞には「イ形容詞」「ナ形容詞」（ナ形容詞と形容動詞の関係については本稿では扱わない）の２種類があることは広く認識されており、前者は名詞の前に立つ限定用法では「～い」で終わり、後者は同じく限定用法で「～な」で終わることからそのように命名されている。多くの場合、形容詞は、「ものごとの状態、性質、様子などがどのようなものであるかを説明する品詞で、名詞の前に立ってそれを修飾する限定用法と、文の述語として使われる叙述用法がある」と定義されることが多いが、近年、日本語には限定用法で「～の」の形をとる「ノ形容詞」と言うべき３種類目の形容詞（第三形容詞）があるという主張がなされるようになってきた。確かに、

暗黙の　幾多の　一定の　架空の　生粋の　究極の　極秘の　禁断の　従来の　世俗の
相互の　即座の　独自の　二重の　迫真の　非常の　瀕死の　不朽の　不治の　不動の
慢性の　未婚の　無名の　臨時の

など、ノ形容詞と考えられる語が日本語には数多く存在する。本稿ではこれらのノ形容詞の性質と特性を考察する。

2. ノ形容詞の性質と先行研究

ノ形容詞は単に名詞に助詞の「の」が付いただけとは考えにくいいくつかの性質がある。（以下イ形容詞、ナ形容詞、ノ形容詞の「～い」「～な」「～の」の前の構成部分を前部分と呼ぶこととする。）

(1) ノ形容詞の前部分が名詞の本質的な特徴である格を持てない（言い換えれば助詞「が」や「を」を取れない）ことがあり、副詞の用法を持つことさえある。

* 多摩大学経営情報学部　School of Management and Information Sciences, Tama University

(2) ノ形容詞の前部分のみでの使用の頻度が低かったり、叙述用法も不自然になったりすることがある。
(3) 多くの場合、ナ形容詞の前部分は漢字２文字を音読みにする（漢）語や外来語起源のカタカナ語であるのに対し、ノ形容詞の前部分は漢語に加え、「仮の　さすがの　まさかの　その場しのぎの　破れかぶれの　手つかずの　益々の　ノーベル賞級の　事実上の　お約束の」など多様なものが見られる。
(4) 普通な＝普通の、のようにナ形容詞との「ゆれ」が見られたり、有名な⇔無名の、のように反対語でナ形容詞とノ形容詞が分かれたりする。

特に（1）の性質から、ある語群に「ノ」がついたものを「ノ形容詞」や「第三形容詞」として形容詞の下位区分とする研究が行われてきている。

村木新次郎(2012)は『「真紅の」「抜群の」「互角の」「丸腰の」「まやかしの」といった単語を「第三形容詞」/「ノ形容詞」と呼んで、形容詞の下位区分とする立場もある。これらの単語は名詞の本命ともいうべき格の範疇を欠き、連体修飾をうけることもないので、名詞と認めることができない。さらに属性限定をする限定用法や述語として用いられ、形容詞の特徴をもつ。第三形容詞に所属する単語は少数にとどまらない。』と述べ、第一形容詞（イ形容詞)、第二形容詞（ナ形容詞)、第三形容詞（ノ形容詞）がいずれも規定用法、叙述用法、修飾用法を持つことを表に示している。(村木は「限定用法」ではなく「規定用法」という語を用いている。)

さらに『ここで第三形容詞と位置付けた単語が従来「名詞」とされてきたのは、「抜群の（成績)」や「互角の（力)」といった規定用法の形式が「～の」であることに由来するのであろう。しかし、「抜群の（成績)」「互角の（力)」の用法は、「彼の／数学の（成績)」や「国家の（力)」のような用法とは既定の質が異なる。』とし「彼の」「数学の」「国家の」は一般に「だれの」「何の」「どこの」などの疑問詞と対応する名詞に特徴的な関係規定であるのに対し、「抜群の」「互角の」は「どんな」という疑問詞と対応する形容詞に特徴的な属性規定であることを述べている。またノ形容詞の前部分が名詞離れを起こして前部分が文字通りの意味から比況の意味変化（鋼鉄の意志、崖っぷちの戦い、朝飯前、など）を起こすこと、前部分に合成語（底抜け、人並み、ただ同然、など）が多く来ることにも言及している。

町田亙（2008）は以下の４つの論点をあげ、(以下かっこ番号は本稿内で著者が付けたものである。)

(5) 品詞分類にはあまり意味がないのか
(6) わざわざ新しい品詞をつくる必要はないのか
(7) 第三形容詞は形容詞ではないのか
(8) 第四形容詞（とがった、角ばった、のっぺりした、など）は形容詞ではないのか

『第三形容詞は、意味的には、モノの属性をあらわし、モノをあらわす典型的な名詞と異なる。形態的には、述語・連用修飾語・連体修飾語となる場合に、名詞・ナ形容詞語幹・一部の副詞と似た特徴をもつ。機能的には、名詞と異なり、「―が」「―を」などの形をとって文の主語や補語となることは、ふつうない。ちなみに、このような特徴をもつ語はけっして少ないものではなく、多量の語例が村木氏によって示されている。つまり第三形容詞とされる語は形態的特

徴は名詞に近いが、意味的特徴と機能的特徴は典型的な名詞と異なっている。』と述べている。

また、町田亙（2019）は『日本語の語彙には、典型的な品詞の統語的特徴に当てはまらず、複数の品詞の特徴を持つものが存在する。』と述べ、以下のように「相当（だ）」という語が複数の品詞をもっていることを明らかにしている。（番号は著者が付けた。）

(9) 決断するには、相当な覚悟が必要だったはずである。（ナ形容詞、形容動詞）
(10) 事件を知っただけでも相当のショックだったろうと同情していたんです。（ノ形容詞）
(11) 彼女が本格的に仕事につくのは、相当、先のことになる、と覚悟しなければならない。（何も付かず、副詞として機能）
(12) マフィアの友情は日本人の義理に相当するとルイスは説明している。（スル動詞）

羅蓮萍（2005）は、日本語母国語話者と中国人の日本語学習それぞれ100名に、各々25個ずつの前部分を見せ、「な」と「の」どちらをつけるかのアンケートを行っている。ナ形容詞については、ほとんどの日本語話者が「な」を付けると判断しているのに対し、日本語学習者は、各語3割から4割ほどが「の」を選んでおり、日本語学習者にとってはその区別がなかなか難しいことが見て取れる。ノ形容詞については、日本語学習者の判断が割れていることももちろんだが、日本語話者でも「な」と「の」の判断がおよそ2：8かそれ以上拮抗して割れているものが7つほどあり、母語でも判断が難しいことがわかる。

3. 一般的なノ形容詞前部分の特徴

上記から、（例外も認められるので仮に）ノ形容詞を「イ形容詞やナ形容詞と同じように、限定用法を持ち、その後ろの名詞の性質、特徴、様子などを説明する形容詞としての性質を持つ語。限定用法時に「～の」が現れ前部分が名詞としてガ格やヲ格を取りにくい」と考えることとする。

以下、中でも主要な漢語ノ形容詞前部分の例を挙げる。

暗黙　幾多　一定　異例　永遠　海外　架空　生粋　究極　極度　共通　緊急　禁断　空前
偶然　現役　現行　公共　公式　公然　孤高　互角　極秘　渾身　最悪　最高　至高　実際
従来　市販　諸般　人工　垂直　世俗　全能　相互　即座　適度　特有　独自　匿名　二重
任意　年配　万全　迫真　非情　必死　瀕死　普通　不意　不朽　不死　不治　不動　不毛
本当　別格　慢性　身重　無限　無償　無情　無敵　無類　臨時　唯一

一般的にこれらの語には

(13) 中間ではない、「極」「特定、特化」のニュアンスがある。したがって、「最、一、極、無、非、不」などの漢字がよく使われる。
(14) 対照的な二つ（もしくは数個）の概念の一方（ひとつ）で中間が考えにくいものが多い。
(15) 言い換えれば、「そうか、そうでないか」「いくつかのうちのどれ」が決まっていて、どれぐらいそうなのか、を考えにくいものが多い。

究極、極度、緊急、空前、極秘、最高、全能、独自、万全、不死、無限、無敵などは尺度の中での値が最上（下）位に近いものだし、架空（と現実）、偶然（と必然）、公式（と非公式、内々）、匿名（と記名）、任意（と強制）、慢性（と急性）などは対をなしていてその中間が考えにくい。また、それ以外の例も、異例、生粋、共通、互角、垂直、即座、必死、などそれ自体が特徴的で強く決定づけられたニュアンスを持つものが多いことが見て取れる。形容詞の機能の一つが「ものごとの性質、状態、様子などがどのようなものかを叙述する」ことだとすると、特に程度形容詞の場合、それは「どのぐらい」なのかに言及することが多いが、それがすでに極として決定、限定されている場合「～な」を付けて完全な形容詞にすることになんらかの抵抗感があり、「～の」が選択されているように思われる。

焦暁璐（2020）はナ形容詞のナを取った部分とノ形容詞のノを取った部分それぞれに、接尾辞「さ」を付けるテストを行い、ナ形容詞に比べて、ノ形容詞の方が程度性が弱く、接尾辞「さ」が付きにくいことに言及しているが、これもこの性質から来ることであろう。

この特性を踏まえ漢語全体を俯瞰してみると、まず、原則漢字２文字からなる抽象的な意味を持つ漢語は下記の **a～e** に分類され、その中の一群（＝ **d**）がノ形容詞を形成しているようにみえる。**a,b,c** の性質があるとノ形容詞になることは排除され、残った **d,e** の中で上記の（13）（14）（15）の性質を持ったものがノ形容詞に、そうでないものが **e** になるという傾向があるようだ。

a「～する」を伴ってスル動詞になるもの
看過する　経験する、相談する、重複する　伝播する　批判する　勉強する　満足する　明示する　網羅する　など多数
b「～な」を伴ってナ形容詞となるもの　前部分は名詞としてガ格ヲ格を取れるものと（健康、安全、危険など）ほとんど取れないもの（軽快、愚鈍、純粋など）があるが後者が多数派
c　最後の字が「然」で「～とした」が付いて形容詞的にふるまう特殊な語群（トシタ形容詞と便宜上呼ぶこととする。）
漠然　理路整然　平然　毅然　超然　憤然　歴然　雑然　悠然　憤然　憮然　騒然　呆然　唖然　など
d　中間ではない、「極、集中（力）」「特定、特化」「対立項」に類するニュアンスがあり、（従って「最、一、極、無、非、不」などの漢字が一文字目に来ることが多い）、単独で名詞としてガ格やヲ格がとりにくく形容詞としての性質が強いため、「ノ」を伴って名詞を修飾する。[1]
e　上記以外に、典型的な名詞としてガ格やヲ格を伴うものがある。「の」を用いて名詞に先行させることはできるが、ノ形容詞的な限定用法としては使いにくく、あえて限定用法的に用いようとする場合、「～的な」を付けるか、「～が（の）ある」「～を持った」「～が多い」などその語を含んだ何らかの連体修飾節を作ることが多い。
愛情　異種　鬱憤　縁故　温床　快感　希望　功徳　言動　口実　指針　真髄　羨望　忠義

[1] 一部のノ形容詞、ナ形容詞は、「の」「な」なしに直接名詞を限定することができるが、自由にできるわけではなく、下記の例のように、全体がある程度固定された表現になっている。
安全神話　異種格闘技　一流企業　一級建築士　危険思想　仮性近視　既婚（未婚）男性　緊急通報　公共料金　公式訪問　硬質ガラス　正規雇用　相互扶助　耐熱金庫　単独行為　通常運行　必須栄養素　不法占拠　普通郵便　無法地帯　無料（有料）配送　無形（有形）資産　略式起訴　零細企業

鉄則　内容　任務　濃淡　覇権　被害　風習　本能　名声　勇気　余暇　乱世　理想　論点
など

次に、ナ形容詞の前部分が主として漢語や外来語であるのに比べてノ形容詞の前部分にはそれ以外の多様な要素も来ることは従来から指摘されているが、それらにはどのようなものがあるだろうか。以下に例を挙げる。（下線部についてはその下に説明を加える。）

頭でっかち　当たり前　厚手　虻蜂取らず　ありったけ　行きずり　石頭　一人前　一介
命がけ　命知らず　薄手　内輪　えり抜き　お気に入り　お決まり　押せ押せ　お揃い
落ち目　お手上げ　お約束　崖っぷち　看板倒れ　空（から）　仮　がらあき　ガラス張り
桁外れ　子供だまし　心ばかり　例　偽（にせ）　斜め　最果て　さかさま　筋金入り
すし詰め　捨て身　図星　世間知らず　底抜け　その場しのぎ　ダントツ　ツーカー
月とすっぽん　つかず離れず　手つかず　どっちつかず　どんぶり勘定　鳴かず飛ばず
生身　鳴り物入り　逃げ腰　似たり寄ったり　寝たきり　畑違い　番外　久しぶり
一人ぼっち　人並み　札付き　負けず嫌い　丸腰　身の程知らず　未曾有　三つ巴
持ちつ持たれつ　破れかぶれ

これらは、例外もあるが訓読みの語や慣用句的な性質を持つ語、もしくは慣用句そのものであることが見て取れる。逆に言えば、そのような性質を持つ語は単独だと、一見、名詞のように見えるのだが、実際は名詞としてガ格やヲ格を取ることは難しく、通常「～の」を伴って形容詞的に用いられる、か「だ」を伴って述語になる、と言うことができるようだ。

この「慣用句性」は、たとえば、通常は慣用句という印象は受けない「お約束の、生身の、例の」などを見るとわかりやすい。「約束」はもちろん名詞でガ格ヲ格を取ることができるが、「お約束の」には丁寧を表す接頭語とは考えにくい「お」が付き、契約を果たす約束ではなく、芸人が決まって行うギャグやドラマなどで必ずその場面が登場することを意味する。（「お約束の出オチ」「お約束の入浴シーン」）この場合前部分の「お約束」を「またお約束が来ました」とか「お約束を撮影しているときに」のようには言いにくい。「生身の」も単に調理されていない刺身のような生であることを意味するのではなく「生身の人間」「生身の体」で感情に流されることやしがらみの中で生きていることを表し、生身の肉や生身の魚とはあまり言わないだろう。「例の」も意味は英語の example ではなく「あなたが先般話していた、話題になった」という意味で用いられ、（「例の女性」「例の裏金」）その意味で前部分を単独では使えない。（「君それで例を警察に話したの？」）

中には、「義理」のように、通常は格を持つ名詞だが、「義理の」になると「婚姻関係の上に生じた」という慣用的な意味を持つ例も見られる。ノ形容詞に近いふるまいをし（「義理の母」）、その意味では前部分に格がつきにくくなり、もともとの「社会生活を営む上で、立場上や道徳上、他人に対して務めたり報いたりしなければならないこと」の意味は失ってしまう。同じように、「一人前」は「一人前の握りずし」のように文字通り「一人が食べる分の」という意味の場合は、前部分が名詞としてのふるまいをしてガ格、ヲ格を取ることができるが、（「一人前が足りないなら、一人前を注文した」）一人前の職人、一人前の社会人など、「それ相応の社会に認められた」という慣用句的な意味を持つと、前部分は名詞としてはふるまいにくく、（「一人前が就職

した」）ノ形容詞としての色合いが強くなる。

さらに、この下にあるような擬音語擬態語、畳語、四字熟語、ある種の接尾辞がついた語も「～の」を伴ってかなり形容詞的なふるまいをすることがある。これらもノ形容詞としての特徴を兼ね備え、無視できない語群を形成している。

擬音語擬態語・畳語

べとべと（の指）　ふわふわ（のふとん）　しわしわ（のＴシャツ）　ばらばら（の意見）　ぎりぎり（の選択）　でこぼこ（の道）　てんやわんや（の大騒ぎ）　そこそこ（の成績）　まあまあ（の結果）　ぴかぴか（の１年生）　もてもて（の先輩）　久々（の登場）　益々（のご活躍）　個々（のスキルアップ）　直々（の訪問）　上々（のでき）　熱々（のカップル）　別々（の道）

四字熟語

一騎当千（の人材）　起死回生（の一発）　空前絶後（の事件）　五里霧中（の状況）　言語道断（の行為）　才色兼備（の女性）　四面楚歌（の戦況）　縦横無尽（の活躍）　十人十色（の使い方）　正真正銘（のダイヤモンド）　絶体絶命（のピンチ）　千載一遇（のチャンス）　前代未聞（の事件）　得意満面（の笑顔）　難攻不落（の城）　二束三文（の家財道具）　不眠不休（の復旧作業）　悠々自適（の生活）　臨機応変（の対応）

接尾辞がついた語

（戒厳令）下（の都市）（問題）外（の提案）（ノーベル賞）級（の発明）（家族）ぐるみ（の付き合い）（贅沢）三昧（の生活）（非常）時（の措置）（運）次第（の商売）（円盤）状（の物質）（事実）上の（決勝戦）（季節）性の（インフルエンザ）（黒）ずくめ（の一団）（田舎）育ち（の親戚）（作り）たて（の料理）（泥）だらけ（の靴）（色）違い（のセーター）（木目）調（のデザイン）（夜逃げ）同然（の逃避行）（予想）通り（の展開）（想定）内（の展開）（人）並み（の生活）（ロマン）派（の絵画）（期待）はずれ（の結末）（詰め）放題（のピーマン）（白髪）まじり（の紳士）（汗）まみれ（の作業着）（子供）向き（の番組）（男性）用（の日傘）

最後に、単独では副詞としても用いられる一部の語もノ形容詞（的）になることを述べておきたい。

今後（の見通し）　さすが（の手際）　昨今（の世界情勢）　従来（のやり方）　通常（の手順）　当時（の習慣）　普通（のおじさん）　まさか（の事態）　もしも（の場合）　よほど（のこと）

4. おわりに

このように、ノ形容詞は、簡潔にまとめれば、「どのぐらい」と言いにくい極や対立関係、慣用句性、前部分の語尾の接尾辞性に特徴づけられながら、前部分が「ノ」によって形容詞化していくという特徴がある。

漢語の場合、それは、日本語において、どのような条件の語をどのように形容詞に変容させ

るか、という選択の中に生じていると考えられる。ノ形容詞は「～する」「～な」「～（然）とした」がつく漢語に優先して生じることはできないように見え、これらが付く漢語をノ形容詞にすることは極めて難しい。「～する」が付くものは元々動詞的な性質が強く、これを形容詞化する動機が低いと思われるし、ナ形容詞とトシタ形容詞はすでに形容詞として成立してしまっている。それ以外の漢語を形容詞に寄せようとするとき「～の」が付くだけでは意味が取りにくい典型的な名詞（ガ格、ヲ格を取れる）上記 **e** では、ある種の連体修飾化（「～が（の）ある」「～にあふれた」などを使う方法）が見られる。それも不自然な元々形容詞的な意味が強い漢語に、ある種一つの手段として「～の」が用いられ、ノ形容詞が形成されていると考えられる。

一方、上記に例示したような慣用句的色彩が強い複合語、慣用句的な表現、慣用句、擬音語擬態語、畳語、四字熟語は、通常、それだけ言えばある程度言いたいことを表現でき、言いたいことをその慣用句で簡潔に述べたいときに使うことが多い。そのような語を形容詞的に用いたいときに「～の」を付けて名詞の前に置くと、ノ形容詞の性質を強く持つことになると考えられる。一部の副詞や接尾辞のついた語に「～の」を付けて用いることも、ガ格、ノ格を取れない、または取りにくいものを形容詞として用いたいことをひとつの動機としている。

このように見てくると「漢語の中で上記分類 **d** の特性を持つグループ」と「広い意味での慣用句性」「一部の副詞」「接尾辞」という 4 つの要素の上にノ形容詞群が成立しており、特に最初の二つが大きな集団を形成していることがわかる。

参考文献

村木新次郎（2012）日本語の品詞体系とその周辺　ひつじ書房
分類語彙表（1993）　国立国語研究所　秀英出版
北澤　尚（2001）品詞間の連続性についての一考察 ―「ノ形容詞」と「ダの連体形ノ」―（2001）学芸国語国文学　宮越　賢教授退官記念号（33）巻
焦　暁璐（2020）接尾辞「－さ」の接続性からみるナ形容詞とノ形容詞の性質　国語学研究 59
町田　亙（2008）形容詞の品詞性について ― ナ形容詞、第三形容詞、第四形容詞と― 立教大学日本文学（100）
町田　亙（2019）名詞・形容詞周辺の漢語における統語的・意味的性質―「最―」の形をとる語について　立教大学　日本文学 121
村木　新次郎（2003）第三形容詞とその意味分類 同志社女子大学　日本語日本文学　第十五号
村木　新次郎（2006）第三形容詞論を進めたところに何がみえるか　国文学 51
羅　蓮萍（2004）日本語教育における「ノ形容詞」の扱いについて　山口国文 27 巻
羅　蓮萍（2005）「ナ形容詞」と「ノ形容詞」―中国人学習者の選択傾向―　山口国文 28 巻